

## 93

## 医術開業後期試験問題と済生学舎の臨床技能教育

志村 俊郎<sup>1,2)</sup>, 唐澤 信安<sup>2)</sup>, 殿崎 正明<sup>2)</sup>, 寺本 明<sup>3)</sup><sup>1)</sup>日本医科大学 教育推進室, <sup>2)</sup>日本医科大学 医史学教育研究会, <sup>3)</sup>日本医科大学 脳神経外科学

済生学舎は、明治9年に創立され、時を同じくして、第1回の医術開業試験が明治政府により全国で施行された。受験資格は、醫制によると2年以上の実験の証書を持参し、開業する区内の医務取り締まりの押し印を受けたる願書に履歴書を添え府庁に提出の上得られた。医術開業試験は、初期には、年4回施行され後に2回に変更になり、大正5年まで行われた。試験結果は、全て公表され甲：8点、乙：6点、丙：4点、丁：2点で、16問提出され、満点を128点で、平均点64点以下は全て不合格となる厳正な試験が行われたことが推測された。ちなみに明治13年度に施行された第3期の試験では61人が受験し、合格16名、不合格45名であった。明治13年の試験委員は、6名で試験委員長は長谷川泰であった。尚試験会場は、東京と地方数ヶ所で行われた。医術開業試験実地試験の東京での患者供与は、慈恵医院医学校に拠るとの記載も見られている。

医術開業後期試験は、明治16年頃より施行されていたものと思われる。明治27年の医術開業後期試験問題には外科学：(1)骨折の種類症候及治癒の機能(2)下眼窩神経切除術の適応症及術式(3)痔核の原因症候及療法、眼科学：老眼鏡の定義及其補正眼鏡、産科学：分娩器械的作用及后産期に於ける注意が見られ現在の試験問題としても遜色ないと思われる。

済生学舎は、臨床実地に力をいれ、医術開業後期試験の為の教育も積極的に行っていた。明治29年済生学舎医事新報によると、第20回外科手術及び実地演習科は、1週35時間の教授時間で3ヶ月間行われた。その内容例は、屍体を利用して田代義徳講師による血管結紮、神経手術、全肘関節等の切除術、全大腿等の切断術、左右肩関節等の離断術、造鼻術等の成形手術、喉頭摘出術等の頸部手術、左右乳房切断等の胸部手術、胃切開術等の腹部手術が行われた。その他高田耕安講師による打診法通論等の診断学実地演習も行われていた。胸腹部打診および聴診法および喉頭鏡検法等につき実習用に供したる病體並びに健體にして使用したる患者は大約30名其病徴ノ種類ハ数十ヲ超ユと記載されており、臨床実習用の患者の手配がなされたものと思われる。その他神経系の疾患に対しても往々診査演習の機を与たりと記載されている。また石川清忠講師による顕微鏡実地演習科では、病理組織、糞便尿等の演習や微生物学講義及び実地演習が行われた。興味あることには、当時よりも済生学舎は、予防医学の教育にも力を入れており、飲料水空気及び食物等衛生的検査法の演習も行っていたことである。

また医術開業試験問題後期答案全集(村山熊次郎編纂増訂第六版、南江堂書店)により、後期試験問題について神経病編を検討してみると、直接に技能の問題は、少なく全てにおいて治療と鑑別の問題が多く出題されていた。以下具体例を総論より挙げる。各種脳膜炎(小児、結核)、脳溢血、脳出血、脳塞栓、脳腫瘍、癲癇、脳梅毒で、時代を反映して結核や梅毒の問題も多く、現在と同じく脳卒中に感心が高かったことが推察された。次に末梢神経の出題も神経系諸病及末梢神経諸病として見られた。その内容は三叉神経痛の原因徴候及療法、現在でも通用する偏頭痛ノ原因及療法また時代を反映して、慢性鉛中毒の症候及療法、水銀中毒ノ症候及療法も見られている。その他外科各論の頭部ノ外科より術式については、穿頭術ノ適応症及ビ術式が見られ、上縦静脈竇ノ損傷ヲ避クベシと記載され、現在の開頭にあたる注意にも該当すると思われる。

## まとめ

本報告は、済生学舎の臨床技能教育と医術開業後期試験の特に神経系問題の出題傾向の分析に関する調査の医史学研究である。